

ちょっと人権

差別の現実に学ぶということ

人間は尊敬されるべきものだ！号

人権教育セミナー短信 NO. 2 平成 17 年 7 月 22 日

学校支援部 人権教育担当

第2講座 ハンセン病・HIV感染者と人権

なんとなんと、2日目は昨日を超える80名余りの参加者。第2講座は熱気溢れる研修でした。

1 講演 ハンセン病に対する差別偏見と闘い続けて [国立療養所「大島青松園」入所者 曾我野一美さん]

曾我野一美さんは、今年 78 歳の誕生日を迎えました。曾我野さんの発症はおよそ 60 年前。家族と離され、香川県のハンセン病患者療養施設「大島青松園」で毎日を過ごしてきました。

曾我野さんの半生は、ハンセン病感染者、そして、回復者に対する偏見との闘いの積み重ねでした。

特効薬「プロミン」が出回ったのは1948年のこと。

すばらしい効果で、完治・回復者が多くなりました。しかし、完治・回復した元患者の多くが、社会復帰には至らなかった現実、それは、偏見と後遺症によるものでもあり、ハンセン病をめぐる法の立ち遅れ、政策のまずさもあったのです。

そして、もっとも大きかったのは「元患者たちのあきらめの気持ち」であったということです。

何が「あきらめ」を引き起こしたのでしょうか。「生きることをあきらめてしまったことありましたか？」という質問がありました。「もちろん。3 回くらいはね。」と曾我野さん。

また、次のようなやりとりもありました。

Q1 もしもハンセン病に罹患していなかったらどんな人生だったと思いますか？

→「うーん、ハンセン病に罹患していなかったら？というのは答えられないですね。だって、今のわたしがわたしなのですから。」

Q2 次世代へのメッセージがあるとしたら？→「努力を貫きとおすこと。そうして壁を乗り越えてきました。」

Q3 我々は、何を積み重ねていけばいいのですか？

→「正しく知ってください。そして学んだかかわりをつなげ、ひろげていってください。」

いかがですか？曾我野さんのスタンス。ほんわかとしていて、それでいてなんだか、力強く感じませんか？

「今の自分が自分」「努力し続ける」それが良く生きるということ。 私たちはこのメッセージに、何を、どう返しますか？



2 実践発表 HIV・性の教育 ～いのちの学び 本校の実践から～ [高知中学・高等学校 教諭 増田和剛さん]



「いのち」について学びきっかけは、子どもたちに伝えるものがない自分に気づいたときでした。そして子どもたちも、語れない自分に気づいたのです。

10 代女性の人工妊娠中絶率が高い本県において、高校生とともに、「いのちの学習」にまっすぐに取り組んだ増田先生と、高知高校の生徒会の仲間。

もともとは「性」について知っていこうという提起でしたが、やがて、わが国だけでなく、世界の諸地域でのHIV感染者と人権について学び始めました。

他校のさまざまな生徒との意見交流、外国の仲間との交流、そして、自分を支えてくれている家族や仲間の存在に気づくことで、ことばを、学びを獲得し深めていく生徒たち。そして…。

ワークでは、「自分だけの伝えたい大切なことば」作りに没頭する先生方の姿がありました。文字で、身体で表現すること、そういったワードはみんな持っているんです。

後段では、HIV感染者の人権課題に取り組んだ高校生たちの気づきや活動について、高校生の「ナマの声」も交えてのお話がありました。子どもたちと大人が1つの課題をオープンに論議するために、話題の引き出しをたくさん開けておいてくれるとうれしい、と。また、教員として、学校として、HIVや人権課題というのは、決して遠い存在なのではなく、身近にあって、共に考え共存をめざす力を必要としている課題なのだ提起されました。

講座を終えて、参加者から、質疑や意見をたくさん寄せていただいています。うれしいですね。

さあ、来週は「自尊感情を育む人権教育」(第3講座:佐賀町&第4講座:吉川村)です。